



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校内居場所カフェ実践の意義を考える：公開研究会「高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか」に寄せて
Author(s)	横井, 敏郎
Citation	公教育システム研究, 18, 127-135
Issue Date	2019-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75774
Type	departmental bulletin paper
File Information	060_AA11562857_18.pdf



<解 題>

高校内居場所カフェ実践の意義を考える
—公開研究会「高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか」に寄せて—

横井 敏郎*

—目 次—

はじめに—公開研究会の開催経緯—

- 1 生徒との関係づくりと問題探索の機能
- 2 安全・安心の場と信頼関係
- 3 教育の論理と異なる質の空間と第三者性
- 4 文化の提供と多様な価値、生き方の選択
- 5 信頼できる大人との出会い、生徒の社会関係と資源の空間の拡張
- 6 学校構成論理の二重化と立体空間化
- 7 高校内居場所カフェが直面する課題

おわりに——ユースワークとしての高校内居場所カフェ

はじめに—公開研究会の開催経緯—

2018 年 11 月 21 日、北海道大学大学院教育学研究院において公開研究会「高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか—2つのカフェ運営の事例から—」を開催した。この研究会は、科研費「拡散・拡張する公教育と教育機会保障に関する国際比較研究」（18H00970、代表：横井敏郎）のメンバーである高橋寛人氏（横浜市立大学）がこの間、NPO や高校教員、行政職員等の方々とともに進めてこられた研究活動¹を基礎として提案いただいた企画である。

高橋氏には、過去の科研費研究会で高校内居場所カフェについて研究報告をしていただいていたが、今回、高校内居場所カフェの中でも先導的な役割を果たしている2つの運営団体の方々を招いて講演をいただき、議論を行う公開研究会を開催した。スピーカーとしてお招きしたのは、一般社団法人 office ドーナツトークの田中俊英氏、NPO 法人パノラマの石井正宏氏・小川杏子氏である。田中氏は大阪府立西成高校で「となりカフェ」を、パノラマの石井氏と小川氏は神奈川県立田奈高校の「ぴっかりカフェ」を運営されている。現在、高校内居場所カフェは全国で50ヶ所に上るが（朝日新聞 2019 年 8 月 19 日）、その最初が西成高校の「となりカフェ」であり、次いでそれを参考に開設されたのが田奈高校の「ぴっかりカフェ」であった。今回、居場所カフェをスタートさせた2つの団体の方を招くことができたわけである。そのせいもあって、本研究会には学外者含めて30名ほどの参加を得た。

* 北海道大学大学院教育学研究院教授（教育行政学研究室）

¹ 横浜市立大学の研究活動の成果は、高橋編（2016）および高橋編（2017）にまとめられている。

3 人のスピーカーには、高校内居場所カフェの活動内容や理念、そして活動の運営上の課題や行政との関係に焦点を当てて話をしていただいた。小川氏にはふんだんに写真を用いながら、「びっぴりカフェ」が開設された経緯とカフェの様子や役割、居場所カフェのソーシャルワーク等へのつながりなどについて話していただいた。田中氏には、「となりカフェ」が開設された経過を行政とのやり取りや高校教員との関係づくりなどの点から話していただいた。最後に石井氏には、居場所カフェを作るに当たって高校内における居場所カフェ（運営団体）の立ち位置のポイントについてお話しいただいた。その内容は、本誌の研究会記録の通りである²。

高校内居場所カフェに対する関心は少しずつ高まってきているようであり、数も増えてきている（『朝日新聞』2019年8月19日）。本研究会の後になるが、高校内居場所カフェを実践してきたり、応援してきた人々の手になる書籍も刊行された。居場所カフェ立ち上げプロジェクト編『学校に居場所カフェをつくろう！ 生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』（明石書店、2019）には、その成り立ちからコンセプトや活動の内容、居場所カフェを作るためのポイントなどが分かりやすく書かれている。

しかし、高校内居場所カフェは始まって間もない取り組みであり、まだ十分な社会的認知を得ていないし、その実践の特質や社会的あるいは教育的な意味についてはこれから議論が本格化していくであろう。ここでは本研究会の記録の解題を兼ねつつ、高校内居場所カフェに対する認識を深めるため、それはいったいいかなるものか、その意義はどのように捉えられるのかを考えてみることにする。

1 生徒との関係づくりと問題探索の機能

高校内居場所カフェの狙いが高校中退防止にあることは、これを進めた当事者の発言からも明らかである。問題はそのための手立て、特に生徒に支援の手をいかに届けるかという点にあった。

実は、札幌市では高校内居場所カフェに先行して、札幌市立札幌星園高校昼間定時制において、2000年代に「進路指導ルーム」を設置し、新たな進路指導実践が取り組まれた。その詳細はいくつかの文献に譲る（市原 2009、市原 2011、宮浦 2007）。同校では進路未定者が多数出しており、それを少しでも解消する方策を検討していた。しかし、教員にはその知識やスキルが十分ではなく、また少ない教職員で進路開拓を行うことは難しかった。そこで、外部から進路支援スタッフを学校に入れるという取り組みが開始された。

その際、重要な点は、外部から専門的スタッフを入れたことだけでなく、「進路指導ルーム」という場所を作ってスタッフを常駐させ、スタッフと生徒が日常的に接触でき、関係づくりを通して生徒にアプローチしたことである。種々の困難を抱える生徒たちが高校にとどまり、卒業にまで漕ぎつけることは困難である。それに加えて時間と労力がかかる就職活動を勉学やアルバイトなどを並行しつつ行っていくかねばならず、最初から自らの進路についてあきらめ、考えようとする者も多い。そうした生徒たちには単に面接対策などのスキルを教えるだけでは足りず、そもそも進路相談自体が成り立ちにくい。そうした生徒たちに対して、スタッフはただ決まった時間

² 小川氏がパワーポイントで見せてくれた写真を記録に掲載できないのが残念である。居場所カフェの写真はNPO パノラマのHP（<https://npo-panorama.com/cafe/>）でご覧いただきたい。

だけ相談などを行うのではなく、頻繁な相談機会とそれ以外のさまざまな接触点を作り出すことで生徒の意欲と希望を引き出し続けた。札幌星園高校は高校再編によって 2010 年 3 月に閉校となったが、この取り組みと発想は札幌市立札幌大通高校に引き継がれていく。

こうした関係づくりを通した進路指導は同校のみならず、進路多様校で広がりつつある（酒井 2007）。高校内居場所カフェも関係づくりを通した生徒へのアプローチを採用していると言え、両者は共通している。

ただ、札幌星園高校の「進路指導ルーム」実践はあくまで進路指導という分野に特化した取り組みであった。これに対して、高校内居場所カフェは特定の分野や目的に特化せず、幅広い観点から生徒にアプローチしようとしているところに特徴がある。生徒が支援を要する問題は多く、生徒自身もそれらを整理できているわけでもなく、そもそも問題を抱えているという意識すらない場合もある。こうした生徒たちに幅広く網をかけ、接触を図って問題を見出していくことに高校内居場所カフェの重要な機能がある。

貧困が多くの困難校の生徒たちに重くのしかかっているが、貧困は単なる経済的困窮としてあるだけでなく、さまざまな回路を通じて多様な問題として発現する。生徒が勉学から家庭環境や人間関係、進路や健康など、どの領域のどんな内容の問題に直面しているかは分からない。特定の領域に絞った支援も必要だが、問題を広く掬い取るには、生徒が自ら話すことができるようなオープンな場が効果的である。

2 安全・安心の場と信頼関係

「となりカフェ」を始めた田中氏は、高校内居場所カフェをサードプレイスと捉えている³。家庭でもなく、学校でもなく、それらの固定的人間関係や緊張状態から離れることができる場がサードプレイスである。田中氏はサードプレイスとしての高校内居場所カフェのもつ力として、安全・安心な居場所、初期的なソーシャルワーク、文化の提供の 3 つをあげている（田中 2019）。

これら 3 つはワンセットで提示されており、どれか 1 つだけが大事ということとはできないが、筆者には特に 1 つ目の安全・安心な場が他の 2 つの基礎として位置にあり、特に重要なものではないかと思われる。ソーシャルワークを行うにしても文化を提供するにしても、まず居場所カフェが安全・安心な場でなければ生徒たちは来ないだろう。

田中氏は安全・安心な場について次のように言う（同上）。

主として経済的下流層の家庭で見られる緊張状態（暴言＝心理的虐待、親の不在＝ネグレクト等）がない空間は、生徒にとってはむしろ貴重なものです。緊張状態はセカンドプレイス（教室）でも生徒を襲い、その極端なものはいじめでしょうが、いじめでなくても、暴言が普通に飛び交うのが生徒にとってのセカンドプレイス＝教室です。それらから自由になれて「安全」な状態でいることで、「安心」を生徒は得ることができます。安全と安心は、現在の主として下流層の子どもたちにとって、それほど貴重なことなのです。

³ 学校内にあるという点から、より正確には「2.5 プレイス」という言葉も使われる（鈴木晶子・松田ユリ子・石井正宏 2013、鈴木 2019）。

こうした場だからこそ、生徒たちはやってくる。安全・安心があるからこそ、生徒は自分の内側にあるものを表出することができ、たとえそれほど明瞭ではなくても、何らかのメッセージとして伝わっていく。

札幌星園高校の「進路指導ルーム」もそうした安全・安心な場として作られていたであろうが、筆者は当時、上の2つ目のソーシャルワークの面に注目しており、安全・安心な場という面を明確には意識していなかった。

この安全・安心な場であることと、石井氏のいう「信頼貯金」(石井 2019)は大いに関わっている。関係づくりを通じて生徒とスタッフやボランティアの間に信頼関係が生まれる。それが可能になるのは、まず居場所カフェが安全・安心な場だからである。そもそも居場所とは安全・安心な場であるはずだが、そうした当たり前ともいえる安全・安心が高校内居場所カフェの最も根本的な構成原理であるといえよう。

3 教育の論理と異なる質の空間と第三者性

こうした安全・安心な場である居場所カフェは、セカンドプレイス＝教室とは異なった空間である。教室はあくまで教育課程によって編制された場であり、教育の目的と基準を基軸として構成される場、つまり教育の論理に基づいた空間である。これに対して、居場所カフェはこうした狭義の教育の論理とは異なる質の空間である。

石井氏は居場所カフェを「学校という均質空間に現れた不均質空間」という。「不均質空間」とは、「いい加減なルールと不完全なサービス、何かがあるけど何かがいつも足りない」といった「未完成の突貫工事的設え」である(石井 2019)。学校を教育の目的や基準などに沿って一切の隙がない「均質空間」とするなら、居場所カフェは特定の目的や基準によって厳格に構成される場ではなく、多様な論理と主体が交差する場ということもできよう。

石井氏は居場所カフェの第三者性を重視する(公開研究会報告)。居場所カフェはあくまで学校の総体的な教育活動空間の中に置かれており、学校と敵対することが目的ではないが、学校の論理に完全に従属しては存在意義が失われる。あくまで生徒の利益を考え、学校に対して第三者性を持つことがこの空間の異質性と安全・安心を担保する。このように学校や教育の論理に対して異質性や第三者性が、居場所カフェのまた重要な構成原理である。

4 文化の提供と多様な価値、生き方の選択

田中氏が言うソーシャルワークと文化の提供は居場所カフェがもつ欠かせない力である。特にソーシャルワークは中退防止に欠かせないが、ここでは確認するだけにとどめたい。

文化の提供(石井氏「文化のシャワー」)については、家庭との関係が意識されている点に注意しておきたい。居場所カフェでの特徴は、生徒に音楽や物語、ファッションに触れる機会を与える点にある。田中氏は、多様な価値を学ぶことが貧困な環境にある生徒には非常に重要だという(田中 2019)。

貧困は・・・人々に多様性を与えません。・・・多様な価値も与えず、暴言や暴力は人々を傷

つけるものであるものであってそれは決して「しつけ」ではないという当たり前の価値ですら、子どもたちには与えない。

また、生徒は多様な価値を道徳的な文言から学ぶことは難しい。リラックスして享受するには音楽や物語、ファッションが効果的である。そして、これらを通じた「多様な文化と価値の獲得」は「虐待の連鎖から生徒を解き放ち、より自由な生き方を選択できる「土台」になる」と田中氏は述べる（同上）。

文化の提供とは、単に流行や中上層文化を身に着けさせることが目的なのではない。貧困や虐待の環境から抜け出すために、社会には多様な文化や価値があり、多様な生き方があること、そしてそれらは決して無関係なのではなく、自分たちにも別の生き方がありうることを学ぶ機会が必要になのである。

居場所カフェに來たからといって生徒たちが現在の環境から必ず抜け出せるとは言えないが、文化と価値を学ぶことは、少なくとも自分が置かれている環境や人生の可能性の幅について意識させてくれるだろう。居場所カフェのもつ文化の提供とは、家庭や生活環境との関係で位置づけられていると捉えるべきものである。

5 信頼できる大人との出会い、生徒の社会関係と資源の空間の拡張

高校内居場所カフェは、カフェを運営する団体のスタッフとの出会いとなる。安全・安心な場を生徒に提供し、関係づくりと通じて生徒との「信頼貯金」をためていくことで、スタッフは生徒にとって「信頼できる大人」となる。信頼はまた高校居場所カフェを構成するために不可欠な原理である。

居場所カフェの実施は運営団体のわずかなスタッフだけでは不可能であり、ボランティアが大きな役割を果たす。ボランティアはカフェの運営をサポートすることが第一の仕事であるが、また生徒にとっては家族や教師以外の大人との出会いをたらしめてくれる人そのものである。「文化の提供」で見た「多様な文化と価値」を生徒に触れさせる機会でもある。

さらには、ここでの出会いを通じてアルバイトなどの機会が得られる場合もある。これは生徒の他者との関係性が学校外に広がることを意味する。またカフェ運営団体とつながれば、生徒は高校在学期間を超えた関係をスタッフともつことができるかもしれない。こうして居場所カフェは学校内において限られた時間だけしか実施されないが、そうした場と時間の物理的な限定性を超えて生徒の社会関係と資源の空間を拡張していつているのである。こうした点も居場所カフェのもつ機能と考えることができる。

6 学校構成論理の二重化と立体空間化

以上から分かるように、高校内居場所カフェは単に貧困な生徒をソーシャルワークで支援するだけのものではなく、教育課程を基軸として平面的に編制された均質な学校空間に、そうした狭義の教育だけでは充足し得ない面での支援や補償の空間を持ち込むものである。学校は基軸となるフォーマルな論理とともに、インフォーマルな論理によっても構成され、構成論理が二重化さ

れることになる⁴。異質性やインフォーマル性は、何も居場所カフェのみがもつものではない。たとえば、相談機能やケアの比重が高まっている現在の保健室はすでにそうした異質性をもった場となってきたといつてよいだろう。図書室もそうした空間となりうる。

こうした動きを空間的に捉えれば、居場所カフェなどの導入は学校空間を均質で平面的なものから異質な部分空間をはらんだ立体的なものへと深化する。多部制単位制高校など、困難な状況にある生徒が多く通う高校ではすでにさまざまな取り組みが行われている。筆者が比較的良好に知る札幌市立札幌大通高校や「ぴっかりカフェ」を置く神奈川県立田奈高校では豊富な支援や学びの機会を設けている⁵。こうした多様な取り組みの多くは何らか学校の外部とのつながりをもって行われている。学校が生徒のニーズに応えようとすれば、何らか外部資源と連携協力する必要があり、それを通じて通常の教育課程で編制された学校空間の中にそれとは異質であったり、別の論理で動く場が生み出されることになる。つまり、学校が生徒に必要な外部資源と接続しようとすれば、学校空間は異質な場を内部に作り出していかざるをえない。

このように捉えるならば、高校内居場所カフェは部分的な存在でありながら、学校空間を立体的な構造へと作り変えていく力をもつものといえる。高校内居場所カフェの意義は生徒支援機能にとどまらず、学校のあり方の見直しにまで波及するものである。

7 高校内居場所カフェが直面する課題

高校内居場所カフェに賛同する人々の輪が少しずつ広がってきてはいるが、いくつかの課題やジレンマにも直面している。

第一に、依然として学校教員や教育行政から十分な支持を得ているとはいいがたい状況にあることである。田中氏らによると、導入当初、なぜ高校にカフェが必要か、ただ怠ける場が増えるだけといった反応が教員たちの中に見られ、そうした認識がいま払拭されたかといえ、まだ道遠しといった段階にあるようである（本研究会報告）。また、大阪府の居場所カフェ事業を青少年課から教育委員会に移管するのにも時間がかかったように、居場所カフェ事業は教育行政に位置づけにくいものである。こうした状況に対しては、高校内居場所カフェが生徒にとってプラスになるものであることが明らかになるよう、さまざまな視点から経験を分析し、その効果と課題を共有していくことが求められる。

第二に、高校内居場所カフェの自律性と資金確保の間のジレンマの存在である。居場所カフェの運営体制、特に資金面が非常に不安定であることは、運営団体スタッフの発言にも明らかである。そこで高校内居場所カフェに対する事業助成が1つの解決方法として思い浮かぶ。飲食にかかる経費も大きな金額ではない。

しかし、ここには1つのジレンマが生じる。すでに述べたように、高校内居場所カフェは学校に対して第三者性を確保していることが重要である。そのためには、カフェとその運営団体が行政と学校の単なる下請け機関とならないようにすることが求められる。日本のNPOは自律性が

⁴ 二重化については、レヴィ・ストロースの「真性の基準」論を用いて二重社会を論じた小田（2010）を参照した。

⁵ 田奈高校については、金沢（2016）を参照。

弱く、行政の下請け機関化しているとの指摘がしばしばなされる。経営維持のために事業獲得に邁進せざるを得ない事態も見られる。良心的な NPO の多くは、活動本来の目的に根ざした自律性と経営維持・行政下請け機関化のはざまでジレンマに悩む。高校内居場所カフェも資金的な安定性を確保しながら、第三者性・自律性を維持し、下請け化せず、学校や教育行政に従属しない方法を模索していかなければならない。

第三に、上の 2 つとも関わって、評価の問題がある。高校内居場所カフェ実践の意義を説明する言葉をいかに見いだすか。現代行政のトレンドはニュー・パブリック・マネジメント (NPM) にあり、数量的評価や利用者満足を重視するアウトカム評価などが重視されている。こうした行政トレンドの下、対人援助活動はその効果や意義を伝えるににくい状況に置かれている。高校内居場所カフェ実践も対人援助活動の 1 つである。NPM 型数量評価に対して、質的評価が 1 つの対抗的評価方法として考えられるが、質的評価の方法は自明ではない。つまり、高校内居場所カフェ実践の評価方法はいまだ未確立であり、今後、たえざる試行錯誤によって開発、改良されていかねばならない。

注目したいのは、「校内居場所カフェ等予防支援に於ける成果の指標の作成及び在り方検討委員会」の報告書作成の取り組みである。文献リストの 2 つの報告書はアンケートの数量分析も行っているが、それだけで終わらせず、実践改善に生かすための読み取りを公開討論会や座談会などを通じて対話的に行っている。高校内居場所カフェ関係者がこうした評価実践を試みていることは貴重である。今後、さらに居場所カフェの意味や効果について幅広い視野から吟味し、言葉を紡いでいくような場を作り出していくことが期待される。

おわりに—ユースワークとしての高校内居場所カフェ—

高校内居場所カフェは教育課程を基軸とした教育の論理と異なる性格をもつと述べてきた。では、それは教育とはまったく無関係なのか。

高校内居場所カフェ実践者は初期的なソーシャルワークをその役割として認識している。しかし、居場所カフェはソーシャルワーク以前に、まず若者と関係をつくり、家族＝ファーストプレイスや学校＝セカンドプレイスとは異なる立場に立って（生徒の利益をあくまで第一に置いて）、彼ら彼女らの生き方の選択を援助する活動を行っている。

これは最近、日本でも注目されつつあるユースワークそのものと言ってよい。ユースワークとは、貧困や社会的排除などの事態を解決するソーシャルワークとは異なる。それは若者の主体性、自発性を活かしながら、若者の発達を促していく働きかけであり、若者との関係性を構築し、それを通じて若者に寄り添いながらその生き方の幅を広げていく実践である⁶。高校内居場所カフェの眼目はユースワークにある。その意味では高校内居場所カフェはまさに教育的な実践なのである。

高校内居場所カフェは小さな取り組みであるが、その射程は思いのほか、長く広い。いまは高校が対象になっているが、その考え方は中学校などにも応用可能であろう（朝日新聞 2019 年 9

⁶ ユースワークについては、若者支援とユースワーク研究会・平塚眞樹（2019）、平塚（2019）を参照。

月 10 日)。

本稿の執筆に当たっていくつか文献を参照したが、高校内居場所カフェの意義や特徴についてはやはり 3 人のスピーカーから直接、報告を聞いたことではっきりと理解できたところが多い。その点で本研究会を開催できたことは幸運であり、スピーカーの方々と高橋寛人氏に感謝したい。今後、高校内居場所カフェの意義や可能性についてさまざまな観点から議論が進むことを期待する。

【参考文献】

- 『朝日新聞』2018 年 11 月 26 日「高校内お悩み相談「居場所カフェ」
- 『朝日新聞』2019 年 8 月 19 日「「ゆるい」カフェ、校内に居場所 公立高校、広がる支援」
- 『朝日新聞』2019 年 9 月 10 日「読者は——「心は部品と違う」「居場所カフェを中学にも」
- 石井正宏 (2019)「生きるストライクゾーンを広げる」(居場所カフェ立ち上げプロジェクト編 2019)
- 市原純 (2009)「困難を抱える若者たちへ支援を届けるキャリア教育」『教育』59(10)、2009 年
- 市原純 (2011)「定時制高校における多職種連携と進路支援の取り組み」『高校生活指導』188
- 居場所カフェ立ち上げプロジェクト編 (2019)『学校に居場所カフェをつくろう! 生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』明石書店
- 小田亮 (2010)「二重社会論、あるいはシステムを飼い慣らすこと」『日本常民文化紀要』28
- 金澤信之 (2016)「困難を有する高校生のキャリア支援——神奈川県立田奈高等学校の実践を通しての報告」(高橋編 2016)
- 酒井朗 (2007)『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房
- 末富芳 (2017)「子どもの貧困対策はなぜ脆弱なのか?: 大阪府・高校内居場所(カフェ)事業のアイディア創発から中断までの政策過程」『教育学雑誌: 日本大学教育学会紀要』53
- 末富芳・田中俊英 (2017)「高校内居場所カフェから高校生への支援を考える」末富芳編著『子どもの貧困対策と教育支援 より良い政策・連携・協働のために』明石書店
- 鈴木晶子 (2019)「カフェで交流相談しよう!」(居場所カフェ立ち上げプロジェクト編 2019)
- 鈴木晶子・松田ユリ子・石井正宏 (2013)「高校生の潜在的ニーズを顕在化させる学校図書館での交流相談: 普通科課題集中校における実践的フィールドワーク」『生涯学習基盤経営研究』38
- 高橋寛人編 (2016)『神奈川県立田奈高校での生徒支援の新たな取り組み—図書館でのカフェによる交流相談を中心に—』(平成 27 年度教員地域貢献活動支援事業報告書) 横浜市立大学
- 高橋寛人編 (2017)『横浜市立横浜総合高校におけるカフェ相談活動の取り組みと意義』(平成 28 年度教員地域貢献活動支援事業報告書) 横浜市立大学
- 高橋寛人 (2017)「交流相談カフェの意義と効果: 困難を抱える高校生に「居場所カフェ」を」『月刊高校教育』50(9)
- 田中俊英 (2019)「サードプレイスの力」(居場所カフェ立ち上げプロジェクト編 2019)
- 平塚眞樹 (2019)「若者と居場所をつくる—日欧のユースワークの現場から」『生涯発達研究』11
- 平成 28 年度校内居場所カフェ等予防支援に於ける成果指標の作成及び在り方検討委員会 (2017)『楽

しいコトを意味あるコトに、意味あるコトを価値あるコトに』特定非営利活動法人パノラマ
平成 29 年度校内居場所カフェ等予防支援に於ける成果指標の作成及び在り方検討委員会（2018）『0
が0のままでいることの成果』特定非営利活動法人パノラマ
宮浦俊明（2007）「札幌星園高等学校の進路探求学習・キャリア教育実践」『公教育システム研究』6
若者支援とユースワーク研究会・平塚眞樹（2019）『若者支援の場をつくる vol.1 子ども・若者を支
援する実践者のためのジャーナル』Amazon Services International, Inc.

